日本クリスチャン・アシュラム連盟　秋季号

開心
静聴
充満
献身
奉仕

日本アシュラム

Autumn 1979　United Christian Ashrams of Japan　29

▼連盟は創始者の祈りによって各地に生れたファミリーの全国的な交わりであって、常に新しい家族（単位）の参加を期待している。

黙想

〈福音の時〉

今も働らく医しの主

ステン・ニールセン師
（スエーデン国アシュラムの指導者）

聖書・ヨハネ福音書一章三五―四二節

洗礼者ヨハネの弟子の一人アンデレはイエスが歩いて来られた時、『見よ、神の小羊を』と教えられ、主に従って行った。

翌朝彼は兄のシモンに出会って、『私たちは今メシヤ（救主）に会ってきた』と言い、兄を主のもとにつれてきた。主は彼を見て、『シモンよ、私はあなたをペテロ（岩）と呼ぶことにする』と言われました。これはアンデレの伝道ですが誠に自然になされていることを見ます。

私の国のウプサラでアシュラムを開いた時四人姉妹の一人が私に医しを求めました。彼女の傷は八年間あらゆる治療を受けたが治らなかった。私は主に向って彼女を医して下さいと祈って別れ、その後彼女のことを忘れていました。彼女はその時主の御手が自分にふれたことを感じて人に話した。『それなら繃帯を取ってごらん』と言われて、見ると何の傷跡もなく美しい女性の膚が出てきたのです

次のアシュラムにこの姉妹たちは夫たちを連れて行こうに証しを初めました。その村の教会は誰も来なくなり、最後の会員も死んで、車庫代りに用いられていました。姉妹たちの証しで確信を得た数名が教会に集まり、祈祷会を始めると、死んだ教会を復活する力が上から与えられ、毎週一回聖書を学ぶ会を数ケ月守るうちに、その小さな会堂が狭くなるほど参加者がふえました。祈り会は有力な伝道の支えである。十数名の新しく救われた人々も加わり共に祈って、今その教会は成長しつつあります。会員が会堂の屋根を修理し、礼拝堂を美しく改造しました。小さな会堂はいつも満員です。各自の家でも集会を始め、どこの家にも自然に聞き伝えて人が集まっています。このような自然な伝道がアシュラムから進められることを主はお望みだと思います。

○

近くの村に一つの大農家があり、父母と娘が七名、息子一人の家族で、皆成人して結婚、母は善人で子供たちを自慢し、この世的生活をしていました。所がある日息子が離婚すると言うのを聞いた途端、驚きの余り、人柄ががらりと変り陰けんな女になってしまった。母の中に悪霊が入ったことを皆が感じました。父は何とか彼女を救う方法はないかと考えていたが、ある夜中、彼女が起上って出て行ったので、探し廻り、無気味な予感がして地下室へ下りて行くと梁にひもをかけ首をつっているではないか。大急ぎで降し病院にかつぎ込み、手当を受けたが、何の効果もない。娘たちはすぐキリスト教週刊紙の編集人に相談すると、彼はこの父と病的な母とにウプサラのアシュラムに出るように勧めてきました。

そのアシュラムに以前は大酒飲みで不品行のろくでなしから回心した青年ビルがきていた。彼は『この家族の心要を満たすために協力せよ』との御声を聞き、その母親と話したあと、『主イエスよ、あなたはこの人に住みついている悪霊よりも強いお方ではないですか。どうか追払って下さい』と熱心に祈った時、彼女は全く医されました。

○

もし御言に立って祈るなら、主イエスと使徒時代に起ったと同じ事が今日も起るのです。彼女の娘たちがアシュラムから帰って言いました。『主キリストに在るならその人は新しく造られるって真理なのね。神は何とすばらしいことをして下さったことでしょう』と。娘たちの夫たちがこの奇跡を知った。しかし夫たちの一人は森の大男と言われる無骨者で妻が信者になったことを怒り、聖書を全部読んで妻をやりこめようと思った。その

編集人　海老沢宣道
発行人　大石嗣郎
定価　一部50円　〒50円

時、青年伝道者が森の男に会いにくると聞いて、彼は会う前に強い酒を飲もうとした。妻が言った。

『私の入信について文句を言うなら明日あなたに悪い事が起るわよ』と。夫は高笑いをした。次の日森へ出かけると、のどが渇いて仕方がない。雪の中を車で何度も飲ものを買いに出たという。帰宅して『今日みたいに嫌な日はなかった。お前の言ったことはほんとうかも知れぬ。祈ってくれんか』というので妻は『ビル先生にお願いしたら』言う。彼は人に頼むより自分でやって見ようと、就寝前に祈った。『主よ、私はあなたのものになりたい。確かになれるなら、何か印を下さい』。

次の朝毎日四十本も吸っていたヘビースモーカーの彼が一本も吸う気になれなくなっていた。大きな印である。

彼は地区の体育会の役員をしており、ダンスパーティのポスターを書いて張り出す仕事があった。もう信仰上の理由でできないことを村役場へ行って言うと、『それでは村人とのつき合いを失って大損をするぜ』と言われたが、『私はそれ以上に大きな恵みを受けている』と言って、村々に福音を語り歩く人になりました。

彼はまた祈りの人になり、祈りは必ず聞かれると信じた。ある日この森の大男は夫婦で遠い町の集会に出かけた。彼はまだ亭主関白で妻の意見を聞き入れません。車の中でまた口論が初まると、妻はいつもの沈黙手段を取ったので、彼も何も言わず車を走らせていたが、何とかしなければと思い、心の中で主イエスに祈り始めた。

『妻の意見に聞く方がよいのでしたらその印を下さい。町に入る前に彼女が私にやさしくなってくれることを印にして下さい』と祈り終えた頃、妻が彼の方に身を寄せて、頬をなぜにきたではないか。

『おゝお前の言う事は何でも聞くよ』と大男は答えて仲良く集会に出た。

ある夜半に彼女が一人で窓辺に祈っていると、曇った闇夜なのに一つの大きな星が雲を貫いて輝やき、やがてその周りに多くの小さい星が見えた。主の御臨在を近くに感じた時、小さな星が消えて大きな星が一つ残っている『主よ、これは何のことですか』とお尋ねすると『聖霊に満された信者は他の人をも照していつまでも輝やくが、受身で自分の信仰を守るだけの信者の光はやがて消え去るのだ。他人を照す光の子となることが大切である』と示された。そのような光の子となるために、アシュラムで聖霊を受けたいものです。主が御霊を授ける時、普通の人がこのようなみわざをするように変えられるのです。そして大いなることが極く自然に起るのです。このアシュラムの後にも彼のような働きが各地でなされるよう祈ります。

祈り「天の父よ、このようなすばらしい国際アシュラムを日本に開いて下さったことを感謝します。どうか日本各地にアシュラムの生活者を起し、教会を強めて下さい。アーメン」

聖書霊解（ヨハネ福音書二一章）

『あなたは、わたしに従え』

海老沢　宣道

私は今日まで各種の集会に出席しましたが、主イエス様に対する忠誠心を最も強く養ってくれたものは、アシュラムでした。そこで皆様もぜひこれに参加されるよう心からお勧めしたいのです。

さてヨハネ福音書二一章を味読しましょう。主イエスは十字架上に贖罪のみわざを成しとげられてから三日目の朝に復活され、その日の夕方十一弟子たちに、エマオ途上の二人に、八日後には都の二階座敷に戸を閉じてかくれていたトマスにも現われて励まされました。

然し彼らにはまだ何かが欠けていたようです。主は彼らにガリラヤへ行けと命じられました。ヨハネはここでペテロたちが久しぶりに漁に出たが、その夜は何もとれなかったこと、夜明け頃、岸辺に主が立っておられ、網の打ち方を教えられたことを書いています。前夜の弟子たちは退屈しのぎか、気晴しか、とにかく勝手に網をおろした時は何もとれなかったが　主のお導きの下に伝道する時は必ず収穫があることを示されます。

その時とれた魚は一五三びきでしたがこれは主の恵みを一つも洩らさずに覚えよということです。彼らは主が用意された朝食を頂いた時、主が常に生活を共にして下さることを実感したにちがいありません。

朝食後に主はペテロに『シモンよ、あなたはこの人たち以上に私を愛するか』と聞かれました。『主よ、そうです。私があなたを愛することはご存じです』と答えると、『私の小羊を養いなさい』と牧会伝道の使命を再び授けられました。しかもこの問答は御丁寧にも三度くり返され、ペテロは心の痛みを覚えました。三度、そうです。カヤパの庭で主を知らないと言ったのも三度だったからです。

主が最初の問の中で『この人たち以上に』と言われたことは大切です。主の召命は他人と相談したり比較したりして受けるか否かを決断することではありません。愛の強さを誇らせるためでもありません。主イエスに対する私の愛は全心全霊を尽したものか否かを確かにして下さるお言葉です。このことは後の二二節の御言とも関連があるのです。

ペテロの信仰はここでその名の如くに固められたようです。そこで主は彼がやがて行きたくない所へ連れて行かれ、十字架上に手を伸ばすことになるという殉教を予言されました。伝道は自分の好勝手な所へ行くことではありません。主が行けと命じられる人の所へ行くことです。『私に従って来なさい』と言われた

（ロマ書十章九節）

アシュラムの五大原則

（一）　キリストへの明渡し

のは、どこまでもという意味です。三年前にこの湖畔で初めて主から聞いたのと同じお言葉でした。

所が彼は後からヨハネがついて来るのを見ました。『主よ、彼はどうなるのですか』と聞きたくなりました。然し主は『たとい私が再臨する時まで彼が長生きするのを望んだとしてもあなたには何の関係もない。あなたは私に従いなさい』と再び命じられました。ヨハネは確かに長生きをして各地に伝道しましたが、やはり迫害を受けてパトモス島に流刑となりました。然しペテロはそれより早くローマの都まで行き、皇帝礼拝の違反者として多くの信徒と共に捕えられ、主と同じ十字架では勿体ないと逆さにかけられて殉教しました。

伝説によれば彼は迫害の最中にローマからアピア街道へ逃れてくると主イエスが立っておられるのに驚き『主よ、何処へ』とひざまづいて尋ね、『お前の捨てて来た信者たちの所へ』と言われて翻然と迫害の火中へ引返したとのことです。今日その三叉路にクオバヂス教会が建ち、堂内左側の壁画に彼が逆十字架にかけられているのを見ます。主が私たちの罪のために生命を捨てて下さったことを知る時、私たちも死に至るまで、自分を捨て、十字架を負ってただ主を仰ぎ、従って行きたく願ってやみません。主は『私よりも自分の息子、娘、父母を愛する者は私にふさわしくない』と言われました。この人たち以上に主を愛して絶対に服従して行きたいものです。

（ビリピ書　第二章　十一節）

（三）聖霊の啓導と充満
（四）神の国の体験と献身
（五）教会への奉仕と伝道

釜山アシュラムに使いして

有馬歳弘

七月一九日（木）～二三日（月）まで、主の深い摂理によって山根可弌理事と私は第一回釜山地区アシュラムに参加させていただいた。五月にソウルで開かれた第一回韓国アシュラム（山根可弌、横山義孝両牧師参加）に続くもので、そこに出席された金昌英牧師を中心に準備されたものであった。更に彼の先輩であり、釜山地区出身の林鍾守牧師の深い祈りと願いの実現でもあった。同師のことばによれば一九四九年にスタンレー・ジョーンズ師が韓国を訪れ、指導を受けた林師と元老と、若い教職たちは山の祈祷園で三日間アシュラム集会を実行した。残念な事に教派分裂事件の余波を受けて超教派的な運動に発展しなかった。そうこうしている間に韓国のアシュラム運動は立ち消えになった、長い空白は主が深くさぐり取り扱われる大切な時でもある。韓国に統一教会をはじめとする多くの新興宗教が発生しはじめた。それに呼応する様に教会の中にも、神から直接ことばを聞いたという信徒が現れて、牧師をなじり、長老信徒の悪口を言う者が現れた。この現象に強い嘆きを覚えた林師は再びアシュラム運動への渇きを強くされた。三年前、日本のアシュラムに参加しようとしたがパスポートがおりず、やむなく日本アシュラム連盟発行の書物によって学び、殊に理事長、海老沢宣道師、総務、大石嗣郎師の名に接し深い信頼と尊敬をもって日本アシュラムの運動に近づく意志を強くしたとか。ソウル、釜山と、続いてもたれる韓国のアシュラムはこうした長い間の願いと祈りの中に実現したのであった。この為めに先の第三回国際アシュラムに韓国より三名の出席が実現し、主はまさに時を備え、人を備え、ご指導下さった事を今更の様に感じた。

備えられた会場は、具永基牧師が私財を捧げ出して出来た水昌教会で、現在同師は名誉牧師、若い申東作牧師が活発に牧会しておられる。プログラムは二十日（金）午前十時三十分～午後四時三十分の一日アシュラム、開会礼拝は釜山地区総会議長金載命師によってなされ、続いて林鍾守牧師による「韓国教会とアシュラムの関係」について歴史的な流れをふまえて紹介され、直ちに山根可弌師によって「アシュラムの恵み」について語られた、山根師にとって釜山地区はなつかしい第二の郷里でもあって、職を投げ打って韓国孤児のために尽力なさった所、一同深い感銘を覚え、親しみをこめて「お父さん」と呼ぶがそんな空気を感じ、強い交わりを経験した。昼食は水昌教会の婦人会で準備されたなごやかな一時であった。午後一時三十分から「日本の教会とアシュラム運動」について話す様求められ、私が御用させていただいた。短い質問があり、「アシュラム運動と教会成長の関係は実際にどうだ」とか「教会学校の子どもたちのアシュラムを日本ではどうしているか」等と聞かれた、約七十名の出席者は教職と長老ばかりということもあって、「教会成長」という課題と要求を持っておられる事を知らされ、盛んな韓国教会が更に中味のある教会形成並びに信仰生活を求めていることに大きな力を感じた。続いて山根師が、ご自分の体験を通して「全き明け渡し」について語られ、父親が涙して子供に語りかける様な姿は一同に深い霊感をもたらした。残る三十分で私が「開心」「静聴」「充満」を中心に日本の教会でしている事を実際に行った。どこまでも、アシュラムを学ぼうとするところに主眼があった様に思えたが、この時はアシュラムそのものを体験した。ほんの短い時間に次

から次へと主の前に心を開き、みことばを聞き、喜びと讃美に充された。

終って、準備した教職が集って反省と今後のことについて話し合われた。多くの若い教職は実際に日本に来て、日本アシュラムに参加したい希望を持っておられることを知らされた。「イエスは主である」は両国信徒が等しく言えることである。しかし、この事を親しい交わりの中で実際に全き、助け合って行かなければならない間柄に置かれているのではあるまいか。

第四回国際アシュラム
聖地とインドの発祥地で

国際アシュラムの第四回は、八〇年十月に聖地ガリラヤ湖畔でジョーンズ記念館の落成式を、インドのサトタルでは世界最初のアシュラムが守られてから五十年の感謝式を兼ねて行われる。

米国連盟はその前にドイツのオーベルアメルガウで受難劇を観て、聖地に向い続いてインドに来るがわが連盟は長期の旅行は困難と考え、サトタルの五十年祝会にだけ出席する予定。

▼日本アシュラム二五周年記念大会

明八〇年はスタンレーが日本で第一回のアシュラムを開いてから二五年になるので、ぜひこの事を感謝して全国的協力の下に記念聖会を開きたいと祈る。助言者として米国連盟のマシュズ博士かインドのタイタス師を交渉中である。

▼アシュラムとは故スタンレー・ジョーンズ博士がインドの退修方式を取り入れて創始されたキリスト教の新しい祈祷生活のことである。

▼中部地区アシュラム（第十回報告）

去る九月十四―五日両日にわたり名古屋市名東区の一麦教会で、内村サムエル支部長を助言者として立て奉仕して頂き開心の時から献身の時まで一貫して聖霊のお導きを受けた。出席者は六〇名。大いなるチャレンジに献身を新たに各自の教会へ遣わされて行った。

▼第十七回関東アシュラム（報告）

参加九五名『全き明渡し』体験

去る十月九日～十一日の二泊三日間、奥多摩の福音の家で、委員二八名の篤い祈りにより九五名の参加者を迎え、主題『キリストへの全き明け渡し』（マタイ十六ノ二四）の下、開会礼拝は横山委員長、全体開心は渕江、グループ開心、連鎖祈祷の後、朝の静聴は植村、恵みの時（午前は有馬、午後は寺井）祈りの細胞、労作の時、夜の讃美と立証の時は今井の司会奨励で高円寺の渋谷兄、天門の神山夫人、深谷の松村夫人、池ノ上の飯島兄がアシュラムの恵みを力強く証した。その後、山根委員による医しの時が希望者のため設けられ多数が主の恵みを受けた。三日目はファミリーアワーの後、最後の充満と献身の時を海老沢の司会奨励で守り、互のために祈り、また聖霊の助けによる決意を次々に表明して時の足らぬを覚えた。終りに一同大きな輪となり『ああ嬉しわが身も主のものとなりけり』を唱和、感謝もて散会。

◎各地の予告

▼道南アシュラム（第九回）

来る十一月二日夕刻より四日（日）午前礼拝にかけ、函館千歳教会にて、連盟理事長の海老沢宣道師を迎え、同教会の創立八〇年記念として開催される。主題『イエスは主なり』の下、アシュラムの五大原則を実験する予定。

▼関西アシュラム（十四回）

十一月二二～二三日両日にわたり淀川善隣館にて中路総務、辻中委員長以下地区委員の分担にてプログラムが進められる予定。主題『内住のキリスト』（ガラ二・20）

▼東京城北アシュラム（第十回）

明八〇年二月十一日（月）朝九時半より午後四時まで山根可弍師を中心にして開催の予定。会場、プログラム等は近日中に決定次第発表される。

連盟賛助の祈り

第三回国際アシュラム募金に重点を置いていたため、連盟自体の賛助献金依頼と報告が去る七七年十月以降なされていませんでしたが、今年十月までに左記諸兄姉の温かい協力があったことを感謝を以て報告いたします。（大石総務）

◇七七年度　中部地区（三万）高瀬和子　池ノ上教会（各二万）江古田（五千）小林国也（三千）中島信義、一光印刷（各一千）

◇七八年度　四国地区（二万五千）海老沢宣道（一万）白石万亀子（二千）

◇七九年度　東北地区（六万五千）中部（三万）碑文谷教会　大石嗣郎（各一万）他に広告献金（萱沼、鈴木、三室、仲山）

最　新　刊

海老沢宣道著

アシュラムの原則と実際

定価300円　〒60円

アシュラムの創始者・故スタンレー・ジョーンズ博士の直伝を受けた著者が，平易に解説し今回小冊子にまとめられた。参考書として活用されたい。

日本アシュラム編集部
177 東京都練馬区三原台1-18-1 海老沢方

アパ・ルーム　日本版（1951年創刊）

超教派，超国家，超人種の日毎の霊の糧，世界各国の信仰の友による黙想文と祈り。聖書日課と今日の黙想の課題と執成の祈。

毎号二ケ月分編集・年六回発行
定価120円・〒60円・年1080円

発行所　東京都武蔵野市境南町4-7-5
(〒180)　アパ・ルーム
振替口座　東京1―193834番

東京都目黒区中央町1-21-10
碑文谷教会気付
日本クリスチャン・アシュラム連盟